慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パスカル・ジジャックス、ウーテ・ガブリエル、サンドリーヌ・ジュフレ 男性形とその複数の意味 : 私たちの脳と私たちの社会にとっての問題 (翻訳)
Sub Title	Gygax (Pascal), Gabriel (Ute), Zufferey (Sandrine), Le masculin et ses multiples sens : un problème pour notre cerveau... et notre société (traduction)
Author	立花, 史(Tachibana, Fuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.74 (2022. 3) ,p.27- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ガボリオ・マリ教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20220331-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／This content is protected by the Japanese Copyright Act

パスカル・ジジャックス、ウーテ・ガブリエル、
サンドリーヌ・ジュフレ

男性形とその複数の意味
――私たちの脳と私たちの社会にとっての問題（翻訳）[①]――

立　花　　史

訳者序言

2017年、フランスで包括書法（écriture inclusive）が大きな論争を呼んだ。包括書法の意義はどこにあるのか。

80年代に盛んに議論されたのが、肩書の女性形化（féminisation）である。肩書の女性形化の議論は、男性単数形の肩書（例えばprofesseur）で“女性”まで総称することの難点を挙げ、20年かけて女性形（professeure）の使用を徐々に社会的に認知させていった。この議論が主に、男性単数形の使用を問題にしたのに対して、2010年代の包括書法の議論は、男性複数形の肩書（例えばprofesseurs）で“女性”まで含めて総称することを問題視し

① 〔訳注〕本稿は次の邦訳である。P. Gygax, U. Gabriel, et S. Zufferey. « Le masculin et ses multiples sens: un problème pour notre cerveau... et notre société ». *Savoirs En Prisme*, nº 10, octobre 2019, p. 57–72. また本稿掲載の特集号には、コーディネーターとしてVéronique Le RuとMathilde Meullemanが、編集者としてAgnès Fallerが携わった。原文では、文献名が割注で入っているが、読みやすさを考慮して、本稿では訳注の位置に移動させている。翻訳にあたって、訳者の授業を受講した池元慎氏、川崎哲彦氏、谷口百花氏、土師一聖氏の意見を取り入れ、最後に、言語学者の中尾和美氏にチェックしていただいた。ここに感謝の意を表しておく。

ている。例えば、肩書の女性形化の議論では、個々の“女性”教員を名指したり呼びかけたりする場合、professeur ではなく女性形の professeure を使うべきではという要求だった。包括書法の議論では、“男性”と“女性”の両方を名指したり呼びかけたりする場合、男性複数形の professeurs で済まして言葉の上で“女性”の存在が不可視化しないよう、何らかの仕方で、男性形と女性形を並置しようという提言である。具体案としては、(1) アルファベット順に並べるなりして professeures et professeurs とするか、(2) テクストであれば男性形と女性形を組み合わせた「分かち表記」を用いて professeur·e·s とするか、(3) 中立的な集合名詞句の corps professoral を用いるかである。同様に、学生と言いたい場合、étudiants の代わりに、étudiantes et étudiants を使うか、étudiant·e·s を用いるか、あるいは男女同形の élèves を使用するか。(3) の対処は語によってやや異なる。このように、包括書法の議論では、従来の男性複数形の使い方に代わる代案がいくつか提起されているが、今のところ、社会的合意が成り立つ見込みは立っていない。このようなイデオロギーと実用性の両方にまたがる議論を調停する手段は存在するのだろうか。ジェンダーにまつわる言語政策に関して EBPM (Evidence-Based Policy Making =エビデンスに基づく政策立案) は可能だろうか。

2021 年、包括書法に関してコメントを求められる姿をよく見かけたのが、パスカル・ジジャックスだ。彼は、心理言語学や応用社会心理学の専門家で、文法的性をもつ欧州言語が、話者のジェンダー表象に与える影響を、実験心理学の手法を用いて研究してきた。その彼が、昨春、ウーテ・ガブリエルやサンドリーヌ・ジュフレと三人で、この分野の蓄積の幅広いサーベイとともに共同研究の成果をわかりやすく広めるべく、『脳は男性形で思考するのか？』と題した著作を、辞書で有名なロベール社から出版している[1)]。2021 年 11 月、ロベールのウェブ辞書で性的に中立な代名詞 iel (s) が立項された背景には、この語の浸透とともに、心理言語学の知見があると考えてよい

1) GYGAX (Pascal), GABRIEL (Ute), ZUFFEREY (Sandrine), *Le cerveau pense-t-il au masculin ?: Cerveau, langage et représentations sexistes*, Le Robert, 2021.

だろう。

本稿は、この著書の元になった2019年の論文である。同書の翻訳に先立って、日本語の読者には、本稿で三人のアプローチを知ってもらうとともに、本邦における今後のフランス語教育を再考するきっかけとなれば、訳者として幸いである[2)]。

要約

男女混成の集団を指し示す目的で、例えばles étudiantsという語のように、フランス語において、より一般的には印欧語において、文法上の男性形[②]をいわゆる総称的に用いることは、男性中心主義のある一形態を示している。まず、こうした使用は、男性的偏見（プリズム）を通じて世界を知覚することを私たちに強いる。次にそれは、男性たちに有利な、偏った心的表象をもたらす。最後にそれは、深い言語的な非対称性を表す。というのも男性形が、ありうる複数の意味に結びついている一方で、女性形は、たった一つの意味しか持たないからである。私たちは本稿で、まず、こうしたさまざまな側面を詳しく検討するが、その際に、言語心理学における近年の研究によって私たちの主張を補強するだろう。次に、男性（形）の支配を緩和する目的で開発されたさまざまな書法を調査するが、その過程で、女性たちの見地と同時に男性たち

2）なお、本稿では言及されていないが、フランスの包括書法を吟味する上で、ケベックの言語政策はたいへん示唆に富むものである。ぜひ次の論文をご参照いただきたい。矢頭典枝「ジェンダーの視点からみるケベック・フランス語の言語政策―「通性的な書き方」の定着を目指して―」、『ふらんぽー』42号、2017年、pp. 40–61.

なお、訳者は、矢頭氏を招いて、包括書法に関するワークショップを開催したことがある（立花史、矢頭典枝、片山幹生、オリヴィエ・アムール＝マイユール「Écriture inclusive再論」、日本フランス語フランス文学会2021年春季大会2021年5月23日）。

② 〔訳注〕以下、forme（grammaticale）masculineを「（文法上の）男性形」と訳し、le masculinを「男性（形）」と訳し分けるが、論文の題名と丸括弧内の場合のみ煩雑さ回避のために、丸括弧を解除してle masculinを「男性形」と訳している。

の見地からのみならず、ノンバイナリーなジェンダーの見地から、さまざまな書法の包括〔包摂〕可能性を問うことになるだろう。

キーワード：男性中心主義、言語、包括的言語、通性言語、言語の女性形化
Mots-clés: androcentrisme, langue, langage inclusif, épicène, féminisation du langage
Keywords: Androcentrism, Language, Gender-fair Language, Epicene, Language Feminization

序論

しばしば、言語は私たちの社会の鏡と見なされる。ただし言語は、その単なる反映ではない。言語はまた、私たちが世界を理解する方法にとって重要な触媒の役割を果たすからだ。人類学者エドワード・サピアとその教え子ベンジャミン・リー・ウォーフは、すでに20世紀前半に、私たちの言語が、私たちの考え方を決定するという考えを提起していた。この考えは言語相対論の名で知られ、“私たちの言語体系は、私たちを取り巻くいくつかの要素に注意を向けるよう強いることで、私たちの概念的カテゴリー化に、偏りを――もしくは影響を――もたらす”と要約することができる。この考えは、科学界を越えて、非常に大きな関心を集めたが、厳しい批判の対象にもなり、その批判は、色の知覚のように下位レベルの認知プロセスが言語表現によって決定されることはありそうにないという事実にとりわけ関わる[3)]。

その後、言語と思考のつながりへの理解を同じく目指した、もっと穏健な他のアプローチが提起されてきた。そのうちの一つで、ダン・スロービン（1996, 2003）が詳述したアプローチは、私たちが自分のなかで形作る表象に対してジェンダーのコード化がもたらす影響という、筆者たちの関心を占める問題にとりわけ適した視座をあたえてくれる。彼の学説は「話すための

3）言語相対論に関する方法論的問題の議論についてはLucy（1997）を、この学説のさらに全般的な批判についてはMcWhorter（2016）をご参照いただきたい。

思考」仮説の名で知られており、これがまずもって規定するところによれば、言語とは、私たちにみずからの（広義の）環境を概念的にコード化することを可能にする装置である。こうした世界の概念化は主に言語を介する以上、言語は必然的に、私たちの注意を、みずからの環境のいくつかの属性の方へと向けさせる。筆者たちが関心を寄せる問題にとって興味深いポイントは、言語がしばしば、世界の理解に関与的ではない諸差異を強調する方向へと私たちを向かわせるという観察だ。

Parzuchowski, Boçian & Gygax（2016）は、字義的には「小さい」を意味するポーランド語の指小辞 -ska を扱っているのだが、この研究がまさしくスロービン（1996, 2003）の考えを例証している。Parzuchowski 他（2016）が自身の研究で示しているところによると、指小辞 -ska（フランス語でこの名称はおおよそ piécette〔小型硬貨〕という語に当たるだろう）を付けて渡された硬貨を受け取った人たちは、指小辞を付けずに渡された硬貨を受け取った人たちよりも、3 分後の満足度が低くなっている。執筆者たちは、この違いを、指小辞の使用が、硬貨を受け取った人たちの注意を硬貨の乏しい価値に向けさせて、無意識のうちに（「大きいほど良い」式の文化的理解に沿って）この人たちに硬貨の価値を下げる方向に向かわせたのだと説明している。

この見地では、ジェンダー〔genre〕[4] の文法標識もまた興味深い事例となる。定義上、ジェンダーの文法標識は、ジェンダーがかならずしも話の理解に関与しない場合でさえ、男性か女性というジェンダーを活性化することを私たちに強いる。例えば、« La chirurgienne a réussi ses examens » と « Le chirurgien a réussi ses examens » という二つの文の場合、ジェンダーの文法標識は必然的に、私たちの注意を当該人物のジェンダーに向けさせる。しかしこの二文で、人物たちが試験に受かったことを理解するのに、言及された人物のジェンダーを知る必要はない。多くの研究が示すとおり、私たちは、特別に認知的努力をせずとも、みずからの心的表象のなかにジェンダーを取

4）筆者たちが用いる genre という語は主に、人間を男性と女性にカテゴリー化することをねらいとする規範的な命令を指している。

り込んでいる[5)]。

フランス語のような数多くの言語において、ジェンダーの言語的カテゴリー化は、もう一つの問題を提起する。女性の文法標識は女性というジェンダーをもっぱら指示する以上、« La chirurgienne a réussi ses examens » という文におけるジェンダーは、間違いなく女性と結びついているが、逆に、男性の文法標識は曖昧だ。形式的には、男性の文法標識は男性というジェンダーをもっぱら指示する――これがいわゆる特定的な意味――のだが、この文法標識はまた男女混成の集団、ジェンダー不明〔neutre〕[③]の人物や集団、さらには、ジェンダーが重要ではない人物や集団も指すことができる。これらの典型例はすべて、男性（形）のいわゆる総称的な意味である。この総称的な意味はそれ自体、複数の下位的な意味に分かれる。例えば、男女混成的な集団の概念は、半数が女性で半数が男性で構成される集団、一人が男性で大多数が女性から成る集団、一人が女性で大多数が男性から成る集団などを指すのに用いることができる。これら下位的な意味のあいだで繊細な区別をつけないとしても（大半の研究で区別をつけていないように）、重要なのは、男性という〔文法〕性[④]がいずれにせよ、総称的と特定的の二つの読みのあいだで曖昧だという点である。それゆえ、この曖昧さはまちがいなく私たちの脳に問題を提起することとなり、脳は、文脈に応じてもっとも適切な意味をつねに選別しなければならない。曖昧さを解消するための活性化選択モデル（activation-selection model of ambiguity resolution[6)]）によれば、この選

5）例えば、Garnham, Oakhill, & Reynolds, 2002; Lassonde, 2015; Kennison & Trofe, 2003; Kreiner, Sturt, & Garrod, 2008; Pyykkönen, Hyönä, & van Gompel, 2010; Reynolds, Garnham, & Oakhill, 2006.

③ 〔訳注〕ここでの neutre は、ノンバイナリーのことも、インターセックスのことも、あるいはそれ以外の別のことも意味しうるので、原著者と相談の上、このように訳すことにした。

④ 〔訳注〕以下、genre masculin が、文法的性（文法性）を意味していると考えられる場合には「男性という文法性」とし、人間のジェンダーを意味していると考えられる場合には「男性というジェンダー」などと訳し分けることにする。

6）Gorfein, 2001; Gorfein, Brown & DeBiasi, 2007.

別は、比較的、自動的におこなわれるのであって、それが含意するのは、この選別が私たちの意識的な制御から逃れるということである。選別は、語や文法構造のさまざまな意味とそれらの重みづけとに結びついた諸特性に依拠している。筆者たちが用いる重みづけとは、言語における語や文法構造の使用頻度ととりわけ結びついた、その語や文法構造が有する活性化の効力を意味する。

男性（形）の曖昧さ解消

筆者たちの知るかぎり、男性の文法標識についての意味的曖昧さ解消に関するすべての研究[7]は同一の結論に達していて、その結論とは、“強い文脈（それどころか非常に強い文脈）がなければ、男性という文法性を読む際につねに活性化される支配的な意味は、〔男性を指す〕特定的な意味の方で、この場合、男性という文法性が大抵は男性たちを指し示す”というものだ。これはわりと驚くべき心理学的事実なのだが、実際上これに対する異論は一つも存在しない。所与の情報が、男性（形）の総称的な意味を明示的に活性化するよう指示している場合でさえ、特定的な意味は抑制しがたいもので、特定的な意味が、総称的な意味の活性化にさえ先立っている[8]。この結果は、ある観察と一致しているのだが、その観察とは、“男性という文法性の特定的な意味が、子どもたちに真っ先に教えられる意味であって[9]、そのため、子どもたちの精神のなかでは、この特定的な意味の方が、より親しみやすく、より際立ったものとなる”というものだ。スロービン（1996, 2003）の仮説を継承しつつ、そうやって私たちが引き出すことのできる結論によれば、文法上の男性形が私たちの注意を一貫して差し向けるのは、男性（形）で示される人物と集団が、個々の男の人や男の子、さらには、男の人や男の子で主

7）この主題についての文献の検討については、とくに Gabriel & Gygax, 2016; Sato, Öttl, Gabriel, & Gygax, 2017; Stahlberg, Braun, Irmen & Sczesny, 2007 をご参照いただきたい。

8）Gygax, Gabriel, Lévy, Pool, Grivel, & Pedrazzini, 2012.

9）Gygax, Gabriel, Sarrasin, Oakhill & Garnham, 2009.

に構成される集団を指示しているという事実である。以上のことは、表現する人の意図とはかかわりなく、男女混成の集団やジェンダー不明の集団を示す目的で男性形を用いたいとたぶん願っているような人だとしても、当てはまってしまうのだ。かくして、男性（形）の言説の受信者が、主に男性たちから成る心的表象を自身のうちに形成してしまうのを、フランス語では避けることができない。

この言語的バイアスの認知的かつ社会的な含意は数多いが、すべては私たちの社会の男性中心的な偏見と結びつている。私たちが言うところの男性中心的な偏見とは、男性たちを私たち人類種の基準と考え[10]、それゆえ私たちの世界観の中心を男性たちに位置づけるような傾向のことを意味する。歪みをもたらすこうした視線は、男性形を総称的価値として使用することによって強固に培われる[11]。例えば、いくつかの職業が男性（形）でのみ私たちに提示される際に、そうした職業には女性の方が少ないのだと、私たちは考えてしまう[12]。音楽家のように、ジェンダーの観点ではステレオタイプ化していない職業でさえ、男性（形）でしか私たちに提示されない場合、女性たちよりも男性たちの方がその職業で成功するチャンスが多いのだと、やはり子どもたちは考えてしまう[13]。これらの効果は、子どもたちの社会的アイデンティティに反映するのだが、その過程で、子どもたちが強いられるのは、ジェンダーをつねに活性化することだけでなく、さらには、子どもたちをバイアスのかかった表象の方へと導く仕方でジェンダーを活性化することを、子どもたちは強いられるのだ[14]。例えば、女の子が、男性（形）で提示される集団や職種に身を置いていると、自分がその集団の内部にいることが正当なのかを、さらには、自分がその職種に従事することが正当なのかを疑問に

10）Bem, 1993.
11）Gabriel, Gygax & Kuhn, 2018.
12）例えば次の研究。Gabriel et al., 2008; Horvath, Merkel, Maass & Sczesny, 2016.
13）例えば次の研究。Vervecken et al., 2016.
14）Gabriel & Gygax 2016.

思うようになる。彼女の帰属感情は集団や職種から疎外され、かくして当該の集団や職種の内部で成功しようという彼女のモチベーションに影響をおよぼすこととなる[15)]。とはいえ、文法上の男性形を総称的な意味で用いることが、言語を介して男性中心的偏見を生み出す唯一のファクターでないことは指摘しておこう。それ以外にも、既婚女性と未婚女性の（男性に対してまったく当てはまらない）差別化をもたらすマドモワゼルといった言葉の使用のような非対称性もまた、この偏見に積極的に加担している。もっとあとで私たちは、言語によるコード化に結びついた他の非対称性を議論することになるだろう。

男性（形）の使用に結びついたバイアスを避けるべく、女性形化や中立化といった、さまざまな言語戦略が提案されてきた。これらの戦略は、確固たる利点をもたらすが、ある種の用心もまた必要とする。以下の節では、〔ジェンダーに関する〕言語戦略の変化に対して批判的視座を保ちながら、順々にそれぞれの戦略と、その効果を詳しく調べた言語心理学における経験的研究とを提示してゆくつもりだ。

女性形化の戦略

通常、女性形化[16)]とは、集団のなかで女の人（もしくは女の子）の存在がありうるのを明示化することを指す。例えば、des chirurgiens〔外科医の男性複数形〕を用いる代わりに、女性形化は、des chirurgiens et/ou des chirurgiens のような男女対名詞（つまりはいわゆる対をなす言語形式）を用いることにある。多くの研究が示してきたように、この言語形式には、大

15）Walton & Cohen, 2007.

16）Eliane Viennot（2014）が述べているとおり、私たちはむしろ脱男性形化〔démasculinisation〕という言葉を使うべきだろう。それほどまでに、フランス語において（ただし他の諸言語においてもまた）数世紀にわたってほどこされた変更は言語の男性形化を目指していたわけで、その主たる目的も、ある種の職種には女性たちが就くことができないことを彼女たちに示すことにあった。

人にとっても[17]、子どもにとっても[18]、社会における女性たちの可視性を高める、すなわち、集団における女性たちの存在の認識を高めるという確かな利点がある。

それでも、この戦略はいくつかの問題を提起する。第一に〔第一の異論や議論として〕、この戦略は言及の順番を選択するよう迫る。女性たちと男性たちのどちらを先に名指すべきだろうか。一見、この問いは些細なものに見えるかもしれないが、実際には本質的である。二項を列挙したものに対する私たちの表象は、意味的なファクターと結びついているからだ[19]。例えば、père et fils〔父と子〕や mère et fille〔母と娘〕といった表現で、二項列挙を示すに際して年齢が中心的なファクターであるとき、私たちはいつも年長者から先に言及する。ジェンダーの場合、上で議論した男性中心主義は、男性たちを先に配置するような、階級をなす社会的序列を私たちに強いている。事例は数多く、例えば mari et femme〔夫と妻〕、Adam et Eve〔アダムとイヴ〕、Monsieur et Madame Untel〔だれだれ夫妻〕のような二項列挙とか、さらに言えば、les différences entre hommes et femmes〔男女の違い〕といった表現があり[20]、こうした事例が私たちに示しているのは、どれほどまでに言語が社会関係を反映するのみならず社会関係を育みもするのかということである。私たちは、絶えず男性たちを先に名指すことで、男性たちの地位を後押しするのに寄与し、男性中心的で家父長的な社会モデル（つまり、例えば Eagly & Wood, 1999 によれば、男性たちに比べて、女性たちが低い地位にあり、少ないリソースを管理する社会）を強化しているのだ。言及の序列のこうした効果に必然的にともなうこととして、普段の序列をひっくり返して、les mécaniciennes et les mécaniciens〔機械工〕のように女性たちを先

17）例えば、ドイツ語では Braun, Gottburgsen, Sczesny & Stahlberg, 1998、ノルウェー語では Gabriel。

18）フランス語では、Chatard, Guimond & Martinot, 2005。

19）例えば、Hegarty, Mollin, & Foels, 2016。

20）唯一の反例である Mesdames et messieurs〔淑女と紳士〕については、Hegarty 他（2015）を見よ。

に名指すときに、私たちは、この活動のなかにより多くの女性たちがいると自分のうちで表象し[21]、女性たちを言説のなかでより中心的なものと受けとめるのである[22]。

男女対名詞による解決方法を取ると女性形を使用することにもなるが、これはいくつかの難点をもたらす。というのも、docteur〔医師〕、professeur〔教員・教授〕、ministre[23]〔大臣〕といった一定数の威信のある職種に対応する女性形は数世紀のあいだ、フランス語を含め、いくつかの言語から取り除かれてきたからだ。かくして、活動や職業を表す名詞を女性形で用いることに対してよく言及される〔第二の〕異論によれば、女性（形）の使用は価値が低いものとして受け止められる可能性がある。例えば、un ministre より une ministre と名指される女性は、あまり要職に就いていないと受け取られうるというものだ[24]。〔しかし〕この批判はそれ自体、男性たちを支配的なポジションに置き、かくして女性形をあまり威信のないものと見る家父長制の反映である。

女性形の受けとめ方についての科学的データは異論の多い結果をもたらしている。一方で、Vervecken 他（2015）が示すところによれば、12 歳から 17 歳までのフランス語圏の子どもたちにとって、（身体的かつ心理的な）困難さ・給与・威信の点から見た各職業の受けとめ方は、職業を提示するのに使われる言語形式に、言い換えれば、les physiciennes et les physiciens と紹介するか、単に les physiciens と紹介するかといったことに、左右されない。他方で、Vervecken & Hannover（2015）は、10 歳のオランダ人の男の子らや女の子らが、男女対名詞で提示された方が、自分たちにその職業に就く素質があると感じることを示した反面、男女対名詞の形で提示された際には、その職業に社会的地位の低下を感じ取っていることを発見した。同様に、

21）例えば、Gabriel, Gygax, Sarrasin, Garnham & Oakhill, 2008.

22）例えば、Kesebir, 2017.

23）Burnett & Bonami（2018）は、Madame le/la ministre についての魅力的な取扱説明カタログを提示している。

24）威信の概念の議論については Chatard et al. 2005 を見よ。

Horvath, Merkel, Maass & Sczesny（2015）によって、男女対名詞のネガティヴな効果が、ドイツ人とイタリア人の成人たちにおいても発見された。実際、この成人たちは、職業が男女対名詞の形で提示されると〔男性形で提示された場合よりも〕、女性的なものとしてステレオタイプ化した職業に対してとりわけ、〔社会的地位や給料の低さなどの〕否定的な連想を活性化する。Formanowicz, Cislak, Horvath & Sczesny（2015）の示唆するところによると、この効果は、これら対名詞の使用頻度に結びついているだけという可能性もあるらしい。というのも、このネガティヴな連想は、女性形や男女対名詞の低い使用頻度に結びついている可能性がある様子だからだ。例えばオーストリアのように、三十年以上にわたって包括的な言語形式が存在する国々では、包括的な言語形式が、ネガティヴな含意を持たれることなど、もはやまったく――あるいは、ほとんど――ない。かくして、〔女性形は価値が低いものとして受け取られうることを理由にして〕女性たちの価値を下げないために職業名詞の女性形化を拒むことは、結局のところ、言語を風俗習慣の変化に合わせるのを拒んで、種々の不平等を永続化させることに舞い戻ってしまう。このような悪循環は断ち切って、慣用を変化させ、そうやってこれらの語のなじみのなさに起因するネガティヴな連想を徐々に消滅させるのが望ましい。

男女対名詞の使用に反対してよく出される第三の議論は、その美意識の欠如や重たさ、もっと全般的に言うと、対名詞が担わせる認知的負荷である。美意識や重たさという概念を数量化するのはむずかしいが、これらは読む習慣と結びついている。そういうわけで Gygax & Gesto（2007）が示したところによれば、あるテクストにおいて、読む速度――これは、テクストで提示された情報の処理しづらさを示すシグナルとして受け取れる――は、一つの男女対名詞の三回目の生起の時点では、すでに正常に戻っている。かくして、これらの言語形式は、最終的には、読むことに対して困難さをもたらすものではない。対して、男女対名詞の初回の生起の時点で減速したことの理由がはっきりしない。これは、驚きの効果、つまり、より豊かな（つまりは男性形だけではない）表象を構築すると、より多くの認知資源が求められる

ということに結びついている可能性もあるようだ。いずれにせよ、男女対名詞の存在が、一つのテクスト全体の読みやすさに負担をかけている様子のないことを、この研究は示している。

最後の〔第四の〕批判は、男女対名詞の使用に対して、今度はジェンダー平等の擁護の見地から表明されるものだが、この批判は、対名詞がもたらす、ジェンダーのバイナリーな〔二元的な〕表象にかかわる[25]。というのも、男女対名詞の使用が、女性たちの可視性を高めるのに効果的な手段に見えるとしても、それはまた、私たちの注意を、女性—男性というジェンダーの二元性（バイナリティ）へと差し向けるものだからだが、ジェンダーの二元性（バイナリティ）は、もはや私たちの社会にまったく対応してしない。ジェンダーも——セックス[26]も——ひとつの連続体であって、女性と男性というカテゴリーがそれぞれ極をなすものと見なされうるとしても、この二つのカテゴリーが、実在するカテゴリーのすべてではありえないし、そうあるべきではない。次の節で私たちは、中立化のような、別の形の包括的言語を論じるが、そちらには、この最後の批判が当てはまらず、定義上、包括的言語と呼びうるものにおそらくは、さらに近いものとなる。

中立化の戦略

中立化の概念は相対的に複雑で、それほど、この概念は、さまざまな言語が強いる拘束に応じた、それぞれ異なる表現方法にかかわる。一般的に、中立化の概念は、ジェンダーの見地から、ある集団の構成やある人物を明示化しない方法である。ドイツ語に見られるような、いくつかの場合、中立化は、das Kind（子ども）といった、中性形という三つめの文法的性の使用を指している。それ以外の場合、中立化は、通性語の使用を指していて、通性語は、女性にも男性にも、その性自認に関係なく、あらゆる人物に関連する語である⑤。une personne〔人物〕という語がその完璧な事例だ。それでもやはり指摘しておくと、私たちの社会のように、男性中心的な社会では、humain

25）Gabriel & Gygax, 2016.
26）Hegarty, Ansara & Barker, 2018.

〔人間を意味する男性名詞〕のような、いくつかの通性語[27]が、むしろ男性として解釈される傾向にある。同様に、もう一つ指摘するなら、poète のような、いくつかの通性語は、つねに通性語だったわけではない、というのも何世紀にもわたって、女性形の poètesse が、現在のネガティヴな含み〔皮肉や軽蔑のこもった意味での女流詩人〕を持たずに用いられてきたからだ。

また、中立化は、ジェンダーの見地から、集団の正確な構成を明示化するのを避けるために、集団〔そのもの〕を指し示す語を使用することも指している。例えば、la population migrante〔出稼ぎ労働者の人々〕という表現形式の方が、les migrantes et migrants〔女性出稼ぎ労働者たちと男性出稼ぎ労働者たち〕という男女対名詞の使用より好まれることもある。この二つの表現形式の正確な意味はまったく同じではないにせよ、たいていの場合、その違いは問題を含んでいない。しかし筆者たちの知るかぎり、この種の表現形式は、言語心理学において、いかなる注意も払われて来なかったもので、それと対照的なのは、筆者たちが記述を続けるつもりでいる、他の言語で用いられる三つの異なる中立化の戦略で、つまりそれは、ドイツ語における名詞化[28]、ノルウェー語におけるすべての女性形の消滅[29]、スウェーデン語における性中立代名詞の出現[30]である。

---

⑤〔訳注〕通性語（mots épicènes）は、一義的には、un membre / une membre（メンバー）のように、男女同形で冠詞によってジェンダーを区別する語を指すが、本論考では、une personne（人物）や un humain（人間）のように、名詞の性は男性か女性のどちらかで、意味上はどのジェンダーの人も指しうる語が含まれている。なお、フランスの首相の独立諮問機関である HCE（女性男性間平等高等評議会）が刊行している『性ステレオタイプなき公共コミュニケーションのための実践ガイド』では、後者の語は、通性語と区別して、mots englobants（包容語）と呼ばれている（同ガイド、28 頁）。
https://www.haut-conseil-egalite.gouv.fr/IMG/pdf/guide_pour_une_communication_publique_sans_stereotype_de_sexe_vf_2016_11_02.compressed.pdf

27）Wyrobkovà, Gygax & Macek, 2015.

28）例えば、Sato, Gygax & Gabriel, 2016.

29）Gabriel & Gygax, 2008; Gabriel, Behne & Gygax, 2017.

30）例えば、Gustafsson-Sendén, Bäck & Lindqvist, 2015.

Sato 他（2016）は、ドイツ語について、例えば die　Studierenden〔文字通り、学習中の者〕のように、名詞化した形容詞と現在分詞[⑥]の複数形が、ジェンダーの見地からどのように表象されているのかを検証した。この目的のために、ジェンダーが自明な人を表す語（例えば une　sœur）と、男性名詞の複数形か名詞化された〔形容詞や現在分詞の〕複数形（例えば男性名詞の die Studenten か名詞化によって作られた die Studierende）のいずれかの役割名詞とで作った語のペアたちが提示されていた。参加者たちは、それぞれの語のペアに対して、前者の語で表される人物が、後者で表される集団の一部をなしうるのかどうかを、ただただ判断することになった。例えばこういう具合に。一人の姉妹は、彼ら学生たち／学習中の者たちの集団の一部をなしうるのか。その結果が示すところによると、役割名詞が男性〔複数〕形のときの方が、女性を指すのに用いる語は、役割名詞に結びつけるのがむずかしい。それに対して、〔役割名詞の〕語が名詞化形のときは、この困難は現れない。女性を指す語たちは、男性を指す語たちと同じくらい簡単に、役割名詞に結びつけられる。したがってドイツ語の名詞化形は、有効な中立化の戦略であると思われるが、これを使うことができるのは、動詞や形容詞から派生した役割名詞の場合だけだ。ノルウェーでは、1980 年代以降、女性の文法標識を取り去ることによって、文法上の男性形を中立的なものにする試みがなされてきた[31)]。そのアイディアは、比較的シンプルだ。すなわち、女性形がもはや存在しなければ、男性形が唯一の言語形式となって、そうしてこれが中立なものとなる。この改革は、一見、抜本的で、女性たちを言語上で見えなくさせることになるので、女性たちには逆風のように見えるかもしれない（フランス語に対して、17 世紀にアカデミー・フランセーズがそう望んだように）。しかし、その意図は明らかに平等主義的なもので、この言語改革はそもそも、女性と男性のあいだの平等を推進するほかの措置をともなったものだった。Gabriel & Gygax（2008）と Gabriel 他（2017）は、こうした言語変更の効果を、それが導入された 20 年以上のちに、検証した

⑥ 〔訳注〕原文では participes passés（過去分詞）となっていたので修正した。
31）Norsk Språkråd, 1997.

かったものだ。どちらの研究でも、例えば Sjukepleierne（看護師）のように、女性的なものとしてステレオタイプ化した役割名詞が提示されると、これらの名詞が生み出す心的表象は、それが文法上の男性形にもかかわらず、女性的なものだった。Statiskerne（統計学者）のように、男性的なものとしてステレオタイプ化した役割名詞については、これらの名詞が生み出す心的表象が、男性的なものだった。それに対して、Musikerne（音楽家）のように、性ステレオタイプのない役割名詞の心的表象は、大部分が男性的なものだったので、このことは、文法上の男性形が有する執拗で男性化をもたらす効果を示している。改革が、もし本当に可能だとしても、それが、男性形の特定的な意味を完全に除去しうるのに必要な時間を判断するのはむずかしい。文法上の女性形がつねにこの言語のいくつかの方言的な変種のなかに存在するだけにいっそう、おそらくノルウェーの改革の効果は限定的なものだったのだろう。そういうわけで、ノルウェーモデルに基づく女性（形）の除去はさしあたり、はっきりしない結果をもたらしている。

中立化の最後のオプションは、スウェーデンで 1960 年代には割とおそるおそる提起されたが、それはフィンランド語に由来する性中立代名詞 hen で、hon（彼女）と han（彼）というスウェーデン語の代名詞を補完するものだった。この代名詞は 2012 年に、イェスパー・ルンクウィストによって、児童書のなかに再び導入された。Gustafasson-Senden 他（2015）は、2012 年から 2015 年に、この新たな性中立代名詞の変化を、とりわけ、スウェーデン当局とスウェーデン人一般とによってこの代名詞が受け入れられている度合いを、たどりなおしている。研究者たちの成果が示すところによると、この代名詞は 2012 年、最初は批判されて――この代名詞が子どもたちのジェンダーアイデンティティに問題を起こすと、一部の人々は考えていた――どちらかというとネガティヴな態度に結びついていたが、2015 年には、さらに広く受け入れられて、非常にポジティヴな態度と結びついていた。指摘しておくと、フランス語では、Elmiger（2017）が報告しているように、いくつかのコミュニティ（例えば LGBTQI+）が、現行のジェンダーを示す言語形式を乗り越えるために、il や elle、ils や elles の代わりに、iel / iels のような性中立代名詞の新た

な言語形式を使用し始めた。筆者たちの知るかぎり、フランス語におけるこれらの新たな言語形式に対する認識については、まだ誰も研究したことがない。

女性形化：一つの社会問題

すでに見てきたように、言語表現の女性形化（あるいは脱男性形化）や中立化の戦略は割と数が多く、革新的で、包括的言語のいくつもの興味深い可能性をもたらしている。しかし、これらの戦略は、いまだに深刻な社会的障壁にぶつかっている。そのいくつかは、心理学における研究対象にさえなっている。本節では、いくつかの成果と、そこから帰結する興味深い考察を報告しておこう。

まず指摘しておくと、フランス語圏のコミュニティ、とりわけフランスで、フランス語を守るという公然の目的から、女性形化に反対の声がいまだに数多く出ている。この態度は、歴史的に誤った言語観によるものだ[32)]。というのも、17 世紀まで、男女対名詞のような、いわゆる包括的ないくつもの言語形式が普通に用いられていたし[33)]、近接性原理（現代フランス語ではデフォルトで男性名詞に一致するので近接性原理とは相反する）のような文法規則がいまだいくつも存在していた。フランス語の男性形化、とりわけ、autrice〔女性の作家を表す語〕のような女性形の消滅や、文法上の男性形を支配的な地位に据えることを目指した文法規則の変更が、文法家たちの手で導入され、17 世紀以降、アカデミー・フランセーズに支持されてきた。ただし、当時は、言語の男性形化が満場一致で迎えられておらず、とくに幾人もの作家たちに非難されたが、それはまさにフランス語を守るという目的によるものだった。矛盾は誰の目にも明らかだ。今日フランス語を守りたがっている人たちは、17 世紀にフランス語を守りたがっていた人たちとは反対の理由でフランス語を守りたがっている。このように、現在のいわゆる保護主義的な動機は、変化への抵抗の不合理な形態であって、それは、フランス語の歴史のある時期にしか当てはまらない男性中心的（で性差別的）な規範

32）この問題の申し分のない説明としては、例えばCerquiglini 2018を参照せよ。
33）例えば、Viennot, 2014; Moreau, 1999 を見よ。

を保存することを目指している。言語学的な見地からは、フランス語のような言語において女性形化を妨げるものは何もない[34)]。フランス語を21世紀の社会的現実に合わせるのを妨げることによってフランス語を守りたがるという結局は矛盾した欲望にくわえ、包括的な言語形式の使用にあらがう他の二つの主要なブレーキが、心理学において議論され研究されてきた。

第一に、男性形だけを使う場合が、より包括的と考えられる他の言語形式よりも、いまだはるかに頻度が多いので、私たちの脳は、この新たな言語形式に慣れておらず、そのことが、この言語形式の使用をいっそう複雑なものにしているのだ。実際、この言語形式を使うことができるためには、私たちの脳は、創出された言語形式をつねに制御しなければならず、もっとも日常的になっている男性形の自動的な活性化をおそらく抑制しなければならない。しかし、男性形のこうしたデフォルトとしての使用は矯正することができて、新たな習慣を根付かせるのは割と簡単である。かくして、Koeser, Kuhn & Sczesny（2015）といった数人の執筆者たちが示したところによると、包括的な言語形式にさらされること、これで、その後に自発的にこの言語形式をみずから使うようになるのには十分である。男女対名詞を用いた複数のテクストにさらされたあと、この研究の女性の参加者たちは、自発的に男女対名詞をみずから使う傾向が強まった様子だった。男性の参加者たちについては、結果は女性の参加者たちと同じだったが、ただしそれは、男性の参加者たちに、テクストで男女対名詞が用いられていることを思い出させているときに限られた（研究 #2）[⑦]。ノルウェー語で、Kuhn, Koser, Torsdottir & Gabriel（2014）が同様に示したところによると、参加者たちは、ジェンダーが無標である言語形式を含んだテクストを読んだあと、この同じ言語形式をいっそ

34）Cerquiglini, 2018.

⑦〔訳注〕ジジャックスが参照している論文の要旨によると、「単にジェンダーフェアな複数のテクストを読むだけで、女性たちはジェンダーフェアな言語を使う傾向が強まるのに対して、男性たちは、この種の言語を意識させられる必要がある」と言われている（Koeser S, Kuhn EA, Sczesny S. Just Reading? How Gender-Fair Language Triggers Readers' Use of Gender-Fair Forms. *Journal of Language and Social Psychology*. 2015; 34 (3): 343–357）。

う多く使っている。

〔第二に、〕このような言語形式に触れることが、将来的に包括的な言語形式の使用を促進しうるように見えるとしても、〔包括的な言語形式の使用に対するブレーキとして〕考慮に入れるべきもう一つの重要な要素があって、それは、一定数の人がこうした言語形式に対して非常にネガティヴな態度を堅持している点だ。英語において、Prentice（1984）が例えば示したところによると、包括的な言語形式（例えば he の代わりに he or she）を定期的に思い起こさせることで、これらの言語形式の自発的な使用は増えるが、それでも、これらの言語形式に対するネガティヴな態度を変えることはない。同じ着想から、Koeser & Sczesny（2014）が示すところによれば、包括的言語の擁護論が提示されると、その使用にポジティヴな影響を及ぼしうるのだが、言語実践の変更に対する態度は変わらない。Sarrasin, Gabriel and Gygax（2012）がさらに示すところによると――フランス語とドイツ語において――この種の言葉遣いに対する態度がネガティヴになればなるほど、人々は、言語のなかで性差別的な形式の存在をますます認知できなくなる。幾人かの執筆者たちが主張するところによれば、言語実践の変更に対する態度のさほどの変わらなさは、女性たちに対するもっと全体的な態度、例えば、いくつかの形態の性差別[35]とか、現行システムを正当化するイデオロギー[36]とかに根差している様子だ。したがって、言語実践のいくつかの変更には、どうやら確立された秩序や現行システムの問い直しが先立ってなされなければならないように見える。筆者たちの知るかぎり、この主題についての研究は――私たちが紹介したものを別にすると――ほとんどないため、包括的言語へのありうる態度変更にひそむメカニズムの理解がむずかしくなっている。このような研究が生まれて、そのおかげで、こうした〔態度の〕変化の下で作用しているメカニズムへの私たちの理解がいっそう練り上げられることが期待される。

35）例えば、Sarrasin et al. 2012; Sczesny et al. 2015.

36）Douglas & Sutton, 2014.

結論

ここ数十年でなされた実験心理学の多くの研究が、収斂する形で示しているとおり、文法上の男性形は、ジェンダーについての私たちの心的表象に影響を与えている。男性（形）をデフォルトの値として用いることで、まちがいなく私たちの注意は、男性（形）のさまざまなありうる解釈がどうであれ、男性（形）は、どちらかというと男性たちを指すのだという考えに向けられる。フランス語の場合、確認しておくべきは、言語を変更することで女性たちを公的地位から退けるために、17 世紀の文法家たちとアカデミー・フランセーズによって取られた措置が、4 世紀ほど後でもなお効果を及ぼしているという点である。男性という文法性が、さまざまな仕方で解釈され（しかも用いられ）うるということ、この点を今日のフランス語の文法が見越しているとしても、この多義性は私たちの脳に大きな試練をもたらしていて、脳は、問題になっているのがどの意味なのかをつねに決定しなければならない。男性（形）の特定的意味（男性形＝男性）の使用頻度と、男性（形）に結びついたさまざまな意味の学習手順（特定的意味を先に教わる）とが、私たちの脳が男性（形）の特定的な意味を――自分たちで制御できず――自動的に活性化してしまう傾向を、割と簡単に説明してくれる。

このバイアスを矯正する目的から、言語表現を脱男性形化して社会における女性の可視性を高めるために包括的言語を支援する運動の庇護の下で、いくつかの言語形式が提起されてきた。筆者たちが思うに、この可視性は、社会は男性たちを中心にまわっているという（すなわち男性中心的社会の）考えを変えるためにはとりわけ、たいへん重要だ。これは子どもたちのために重要なのであって、最終的に、包括的言語で生み出された各職業の表象の多様性は、私たちの社会を、リソースのより良い共有へと向かわせうるもので、そうやって私たちは現在の家父長制を追い払うのである。

いくつかの言語形式はまた、ジェンダーの二元性（バイナリティ）の永続的な活性化を避けるのを目指している。というのもジェンダーの二元性は、私たちの社会にもはや当てはまらないからだ（おそらくかつて当てはまったこともない）。しかしながら、男女対名詞のような包括的言語のいくつかの戦略には、社会に

おいて女性の可視性を増やす（そして一連の実際上の結果をもたらす）利点があるとしても、これらの戦略は、ジェンダーの二元性の消滅には貢献しない。これを消滅させるためには、これ以外の戦略、とりわけ中立化の戦略の方がふさわしいと思われる。女性形化であれ中立化であれ、およそこうした新たな言語形式は、いくつもの試練を提示し、さまざまな障害と遭遇する。例えば、こうした言語形式の使用はいまだ比較的すくなく、これらに身をさらすことがないため、使い慣れている方の男性形に比べて、これらを使うのがむずかしくなる。しかし、本稿で論じたいくつかの研究が示すとおり、これらの言語形式にさらされることが増えれば、これらの扱いも楽なものとなりうるし、ゆえに、その使用を促進しうることになる。

さらに指摘しておくと、いくつかの言語形式は、他の言語形式より論争を巻き起こしているように思われる。例えば、étudiant·e·s subtil·e·s といった、いわゆる縮約された形式がそれだ[37]。本稿ではこの言語形式を扱わなかったが、それは、この形式が、実際に心理学における研究対象になったことが一度もないからだ。ただし Chatard 他（2015）の研究は例外である。この研究によると、若者たちに、縮約された言語形式（つまり、それ以降は使われなくなった étudiant（e）という形式）か通性的な[38]言語形式（étudiant/étudiante）かで提示された求人は、その職業で働けるようになるための勉強をやりとげる自分の能力へのより大きな自信をとりわけ、芽生えさせている。それでもやはり指摘しておくなら、どうやら縮約された形式は、ある種のテクスト（例えばインターネット上や新聞上のもの）で文字数を制限する必要にまつわる需要から生まれたようだ。だが、筆者たちが思うに――もちろんこのことも〔実験心理学のような〕経験的研究の対象になるべきだろうが――本稿で論じた形式たちの方が、言語（とりわけフランス語）の男性形化に歯止めをかける力を持っていて、包括的言語という言葉で人が理解するものを表している。

他の人たちと同じく、筆者たちも思うに、フランス語に包括的言語をより

37）例えば、Pech, 2017.

38）同論文の著者たちが「通性的」という語を用いている。

よく導入するためには、綴りと文法の変更が必要だ。例えば、17 世紀まで存在した近接性による一致〔直近の名詞と性・数一致をおこなう方法〕に立ち戻る必要がある。この一致であれば、形容詞や過去分詞の性・数一致が簡単になり、男性（形）への一致という手段を取り払ってくれるだろう（例えば、les mécaniciens et mécaniciennes courageuses）。ほかにもまた、-il や -ul で終わるすべての形容詞（例えば、vil, subtil, nul）を、futile、fragile、ridicule といった通性的な形容詞に変えるような、綴りの変更を検討することができる。こうした綴りの変更は割と単純で、男女混成の集団につける修飾語を簡単に使えるようになるという利点が得られるだろう（例えば、les hommes et les femmes subtiles となって、subtil·e·s にしなくて済む）。

最後に思い起こしていただきたいのだが、包括的言語は、数世紀の年月を経た言語の男性形化に対する一種の反論であって、ある歩みを反映している。その歩みは、まずもって女性と男性の平等を目指しているが、いくつかの表現形式については、あらゆる人の平等を目指している。あらゆる人、そう、たとえ、その人がジェンダーの連続体のどこに位置しようとだ。

引用文献

Bem, Sandra Lipsitz. 1993. « The Lenses of Gender: Transforming the Debate on Sexual Inequality ». Yale University Press.

Braun, Friederike, Anja Gottburgsen, Sabine Sczesny & Dagmar Stahlberg. 2009. « Können Geophysiker Frauen sein? Generische Personenbezeichnungen im Deutschen ». *Zeitschrift für Germanistische Linguistik* 26 (3): 265–283. https://doi.org/10.1515/zfgl.1998.26.3.265.

Burnett, Heather & Olivier Bonami. undefined/ed. « Linguistic Prescription, Ideological Structure, and the Actuation of Linguistic Changes: Grammatical Gender in French Parliamentary Debates ». *Language in Society*, 129. https://doi.org/10.1017/S0047404518001161.

Cerquiglini, Bernard. 2018. *Le Ministre est enceinte*. Le Seuil.

Chatard, Armand, Serge Guimond et Delphine Martinot. 2005. « Impact de la féminisation lexicale des professions sur l'auto-efficacité des élèves: Une remise en cause de l'universalisme masculin? ». *L'Année Psychologique* 105 (2): 24972. https://doi.org/10.3406/psy.2005.29694.

Douglas, Karen M. et Robbie M. Sutton. 2014. « “A Giant Leap for Mankind” But What About Women? The Role of System-Justifying Ideologies in Predicting Attitudes toward Sexist Language ». *Journal of Language and Social Psychology* 33 (6): 66780. https://doi. org/10.1177/0261927X14538638.

Eagly, Alice H. & Wendy Wood. 1999. « The Origins of Sex Differences in Human Behavior: Evolved Dispositions versus Social Roles ». *American Psychologist* 54 (6): 40823.

Elmiger, Daniel. 2017. « Masculin, féminin: et le neutre? | Implications philosophiques ». Consulté le 10 novembre 2017. http://www.implications-philosophiques.org/actualite/une/ masculin-feminin-et-le-neutre/.

Formanowicz, Magdalena M., Aleksandra Cislak, Lisa K. Horvath & Sabine Sczesny. 2015. « Capturing Socially Motivated Linguistic Change: How the Use of Gender-Fair Language Affects Support for Social Initiatives in Austria and Poland ». *Frontiers in Psychology* 6. https:// doi.org/10.3389/fpsyg.2015.01617.

Gabriel, Ute. 2008. « Language policies and in-group favoritism: The malleability of the interpretation of generically intended masculine forms ». *Social Psychology* 39 (2): 1037. https://doi. org/10.1027/1864-9335.39.2.103.

Gabriel, Ute, Dawn M. Behne & Pascal M. Gygax. 2017. « Speech vs. reading comprehension: an explorative study of gender representations in Norwegian ». *Journal of Cognitive Psychology* 0 (0): 114. https://doi.org/10.1080/20445911.2017.1326923.

Gabriel, Ute & Pascal Gygax. 2008. « Can Societal Language Amendments Change Gender Representation? The Case of Norway ». *Scandinavian Journal of Psychology* 49 (5): 45157. https://doi.org/10.1111/j.1467-9450.2008.00650.x.

Gabriel, Ute & Pascal Gygax. 2016. « Gender and linguistic sexism ». In *Advances in Intergroup Communication*, édité par Howard Giles et Anne Maass, 11935. Peter Lang Publishing.

Gabriel, Ute, Pascal M. Gygax & Elisabeth A. Kuhn. 2018. « Neutralising Linguistic Sexism: Promising but Cumbersome? » *Group Processes & Intergroup Relations* 21 (5): 84458. https:// doi.org/10.1177/1368430218771742.

Gygax, Pascal, Ute Gabriel, Oriane Sarrasin, Alan Garnham et Jane Oakhill. 2008. « Au Pairs Are Rarely Male: Norms on the Gender Perception of Role Names across English, French, and German ». *Behavior Research Methods* 40 (1): 20612. https://doi.org/10.3758/BRM.40.1.206.

Garnham, Alan, Jane Oakhill & David Reynolds. 2002. « Are inferences from stereotyped role names to characters’ gender made elaboratively? » *Memory & cognition* 30 (3): 43946.

Gorfein, David S. 2001. *On the consequences of meaning selection: Perspectives on resolving lexical ambiguity*. Washington, DC: American Psychological Association. https://doi. org/10.1037/10459-000.

Gorfein, David S., Vincent R. Brown & Christian Debiaso. 2007. « The Activation-Selection Model of Meaning: Explaining Why the Son Comes out after the Sun ». *Memory & Cognition* 35 (8): 19862000.

Gustafsson Sendén, Marie, Emma A. Bäck & Anna Lindqvist. 2015. « Introducing a gender-neutral pronoun in a natural gender language: the influence of time on attitudes and behavior ». *Frontiers in Psychology* 6 (juillet). https://doi. org/10.3389/fpsyg.2015.00893.

Gygax, Pascal, Ute Gabriel, Oriane Sarrasin, Alan Garnham & Jane Oakhill. 2008. « Generically intended, but specifically interpreted: When beauticians, musicians, and mechanics are all men ». *Language and Cognitive Processes* 23 (3): 46485. https://doi. org/10.1080/01690960701702035.

Gygax, Pascal, Ute Gabriel, Oriane Sarrasin, Alan Grnham & Jane Oakhill. 2009. « Some Grammatical Rules Are More Difficult than Others: The Case of the Generic Interpretation of the Masculine ». *European Journal of Psychology of Education* 24 (2): 23546. https://doi. org/10.1007/BF03173014.

Gygax, Pascal, et Noelia Gesto. 2007. « Féminisation et lourdeur de texte ». *L'Année psychologique* 107 (2): 23955.

Hegarty, Peter, Y. Gavriel Ansara & Meg-John Barker. s. d. « Non-binary gender ». In *Psychology of Gender, Sex, and Sexualities*, Oxford University Press. New York: Dess, N.;

Hegarty, Peter, Sandra Mollin & Rob Foels. 2016. « Binomial word order and social status ». In *Advances in Intergroup Communication*, Howard Giles & Anne Maass (Ed.), 11935. Peter Lang Publishing. http://epubs.surrey.ac.uk/811895/.

Horvath, Lisa K., Elisa F. Merkel, Anne Maass et Sabine Sczesny. 2016. « Does Gender-Fair Language Pay Off? The Social Perception of Professions from a Cross-Linguistic Perspective ». *Frontiers in Psychology* 6. https://doi. org/10.3389/fpsyg.2015.02018.

Kennison, Shelia M., et Jessie L. Trofe. 2003. « Comprehending Pronouns: A Role for Word- Specific Gender Stereotype Information ». *Journal of Psycholinguistic Research* 32 (3): 35578.

Kesebir, Selin. 2017. « Word Order Denotes Relevance Differences: The Case of Conjoined Phrases with Lexical Gender ». *Journal of Personality and Social Psychology* 113 (2): 26279. https://doi. org/10.1037/pspi0000094.

Koeser, Sara & Sabine Sczesny. 2014. « Promoting Gender-Fair Language: The Impact

of Arguments on Language Use, Attitudes, and Cognitions ». *Journal of Language and Social Psychology* 33 (5): 54860. https://doi.org/10.1177/0261927X14541280.

Kreiner, Hamutal, Patrick Sturt & Simon Garrod. 2008. « Processing definitional and stereotypical gender in reference resolution: Evidence from eye-movements ». *Journal of Memory and Language* 58 (2): 23961. https://doi.org/10.1016/j.jml.2007.09.003.

Kuhn Elisabeth A., Koeser, Sara, Torsdottir, Anne E. & Gabriel, Ute. 2014. *Lexically gender-marked role nouns in Norwegian: Effect of prevalent and presented form on readers' recall*. Paper presented at the 17th European Association of Social Psychology (EASP) General Meeting, Amsterdam.

Lassonde, Karla A. 2015. « Reducing the Impact of Stereotypical Knowledge During Reading ». *Discourse Processes* 52 (2): 14971. https://doi.org/10.1080/0163853X.2014.917221.

Lucy, John A. 1997. « Linguistic relativity ». *Annual Review of Anthropology* 26 (1): 291312.

McWhorter, John H. 2016. *The Language Hoax. Why the World Looks the Same in Every Language*. Oxford: Oxford University Press.

Moreau, Thérèse. 1999. *Dictionnaire féminin – masculin*. 1re éd. Éditions Metropolis.

Norsk Språkrad. 1997. Kjønn, språk, likestilling. Retningslinjer for kjønnsbalansert språkebruk［Gender, language, equality of status. Directives for gender balanced language use］. Oslo: Norsk Språkrad.

Parzuchowski Michał, Konrad Bocian & Pascal Gygax. 2016. « Sizing Up Objects: The Effect of Diminutive Forms on Positive Mood, Value, and Size Judgments ». *Language Sciences*, 1452. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2016.01452.

Pech, Marie-Estelle. 2017. Féminisme: les délires de l'écriture « inclusive ». *Le Figaro Premium*. p. 1. Consulté sur http://www.lefigaro.fr/actualite-france/2017/10/05/01016-20171005ARTFIG00337-feminisme-les-delires-de-l-ecriture-inclusive.php

Pentice, Deborah A. 1994. « Do Language Reforms Change Our Way of Thinking? » *Journal of Language and Social Psychology* 13 (1): 319. https://doi.org/10.1177/0261927X94131001.

Pyykkönen, Pirita, Jukka Hyönä & Roger P. G. Van Gompel. 2009. « Activating Gender Stereotypes During Online Spoken Language Processing ». *Experimental Psychology* 57 (2): 12633. https://doi.org/10.1027/1618-3169/a000016.

Reynolds, David J., Alan Garnham et Jane Oakhill. 2006. « Evidence of Immediate Activation of Gender Information from a Social Role Name ». *Quarterly Journal of Experimental Psychology* (*2006)* 59 (5): 886903. https://doi.org/10.1080/

02724980543000088.

Sarrasin, Oriane, Ute Gabriel & Pascal Gygax. 2012. « Sexism and attitudes toward gender-neutral language: The case of English, French, and German ». *Swiss Journal of Psychology/ Schweizerische Zeitschrift für Psychologie/Revue Suisse de Psychologie* 71 (3): 11324. https://doi. org/10.1024/1421-0185/a000078.

Sato, Sayaka, Anton Öttl, Ute Gabriel & Pascal Gygax. 2016. *Assessing the impact of gender grammaticization on thought: A psychological and psycholinguistic perspective*. OBST 90: Sprache und Geschlecht. Band 1: Sprachpolitiken und Grammatik.

Sato, Sayaka, Pascal M. Gygax & Ute Gabriel. 2016. « Gauging the Impact of Gender Grammaticization in Different Languages: Application of a Linguistic-Visual Paradigm ». *Language Sciences*, 140. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2016.00140.

Sczesny, Sabine, Franziska Moser & Wendy Wood. 2015. « Beyond Sexist Beliefs: How Do People Decide to Use Gender-Inclusive Language? » *Personality and Social Psychology Bulletin* 41 (7): 94354. https://doi.org/10.1177/0146167215585727.

Slobin, Dan I. 1996. *« From "thought and language" to "thinking for speaking". Rethinking linguistic relativity*. » New York, NY, US: Cambridge University Press.

Slobin, Dan I. 2003. « Language and thought online: Cognitive consequences of linguistic relativity ». In *In D. Gentner & S. Goldin-Meadow* (*Eds.), Advances in the investigation of language and thought*, 157–191. MIT Press.

Stahlberg, Dagmar, Friederike Braun, Lisa Irmen & Sabine Sczesny. 2007. « Representation of the Sexes in Language ». In *Social Communication*, 16387. Frontiers of Social Psychology. New York, NY, US: Psychology Press.

Vervecken, Dries, Pascal Gygax, Ute Gabriel, Matthias Guillod & Bettina Hannover. 2015. « Warm-Hearted Businessmen, Competitive Housewives? Effects of Gender-Fair Language on Adolescents' Perceptions of Occupations ». *Frontiers in Psychology* 6. https://doi.org/10.3389/ fpsyg.2015.01437.

Vervecken, Dries & Bettina HANNOVER. 2015. « Yes I Can! » *Social Psychology* 46 (2): 7692. https:// doi.org/10.1027/1864-9335/a000229.

Viennot, Éliane. 2014. *Non, le masculin ne l'emporte pas sur le féminin !* Éditions IXE.

Walton, Gregory M., Geoffrey L. Cohen. 2007. « A question of belonging: Race, social fit, and achievement ». *Journal of Personality and Social Psychology*, 82–96.

Wyrobková, Adriana, Gygax, Pascal & Macek, Petr. 2015. *Human and man side by side, woman trapped in a different reality: Word Associations in Czech*. *Ceskoslovenska Psychologie*, 59, 44–56.